

研究ノート

語りに立ち会うこと、語りを更新すること

—2009年度小山ゼミ教育実践—

小山 聡 子

石川 茂 子

2009年度3年次小山ゼミ一同*1

Being audience of the other's narrative and the re-authoring of own narrative

—The educational practice of Oyama's seminar in 2009—

Satoko Oyama

Shigeko Ishikawa

Junior Students of Oyama's seminar in 2009

3年次の演習授業において、学んだナラティブ・アプローチの考え方を実際の生活に適用し、より深い理解に結びつけるため、将来をめぐる学生同士の語りと、ゲストスピーカーの語りに立ち会う場を設定した。それらへのレスポンスを経て、それぞれの語りが更新されるさまを体感するとともに、一連の語りを質的に分析することによって、自らの将来に関する語りが、より積極的に「不安」を引き受けることを含む多声に開かれるものに変化したことがわかった。また学んだいくつかのキー概念を語りの中に読み解き理解を深めることができた。

キーワード 語り、ナラティブ・アプローチ、言いっぱなしの聞きっぱなし、ドミナント・ストーリー、オルタナティブ・ストーリー

I. はじめに

日本女子大学社会福祉学科における社会福祉演習I（選択必修の3年次ゼミ）において、小山（教員）は被援助者を含む身近な他者に対する敬意に満ちたコミュニケーションのあり方をテーマに対人援助の理論と方法について検討してきた。特に後期に学んだ社会構成主義の考え方とその影

響を受けたナラティブ・アプローチの手法を実際の「生活」に適用して考える真の理解に結びつけるため、学生主体の取り組みとして特定のテーマにみる「当たり前」の探索（小山他2008）、また、入念なウォーミングアップを踏まえてのグループ内お話作り（小山他2009）に取り組んできた。2009年度は、後期に学んだナラティブ・アプロ

*1 青木恵聖・大塚明佳・落合歩・北村すみれ・木津明日香・木原亜季・塚本奈緒子・中田有紀・野島英里・細沼理恵・山本歩美・脇田真衣・渡辺瑠衣

チの考え方を踏まえて、一連の語りの中に学んだ概念を読み解き、さらに自らを語りなおす実験的取り組みを行った。本稿ではその意図とプロセス、そして結果として見えたことを報告する。

Ⅱ. 意図とプロセスの概観

本授業では、例年通り前期にカウンセリング理論と技法に関する学びを深めた後、後期、冒頭で野矢茂樹による『論理トレーニング』（野矢1997=1999）を利用して論文を書くとはどのようなことかについて2回の講義と演習を実施。その後、野口裕二による『物語としてのケア』（野口2002=2003）をとりあげ、2～3名のグループで毎回2章ずつ担当して概要発表とディスカッションを行った。これは、ここ数年の流れと同様で、対個人支援のつばを押さえた後にそれを現代の社会思想に位置付け、ソーシャルワーク及び根底にあるコミュニケーションのあり方そのものを考察することを目指すものである。すなわち前期に学ぶ対人援助の理論が、単に個人の直面する不具合を病理ととらえ、環境適応にのみいざなうことを警戒する試みである。2008年度よりも当該文献そのものの学びに要する時間を縮め、12月に入って以降の5回分について、当初は卒業研究のテーマと構成発表に当てる予定を組んだのは、3年次の後半に入って就職活動が始まることを念頭においた学生メンバーからの要望によるものであった。つまり、4年次には社会福祉士の資格取得を前提とした実習も予定される中で、より早くから卒業研究に組み込みたいという意向である。

しかし、実際に野口の文献輪読が終了した時点で小山（教員）がとらえた印象は、学んだ概念の理解深化がさらに必要ではないかという懸念であった。後期に社会構成主義に基づく文献を取り上げるのはマイクロレベルの援助実践に寄せられる近年の批判¹⁾と真摯に向き合い、社会福祉におけ

る既存の援助枠組みにおいても、また日常の市民生活においても、より「まっとうな」援助-被援助関係（互助関係）を作り上げることができるようになることを目指してきたためである。当該演習授業をリードする教員の中にはそのような課題意識があって、特に後者の意図、すなわち日常の人間関係において、より多様性を尊重しあえる語り合いを構成するひとりひとりのあり方追及にこだわってきたといえる。このような意図のもとで、今期も学んだ概念を実際の生活の中で理解し、活用できるようになること、そして前述のように卒業研究にむけてイメージをつかみウォーミングアップをすること、この両者を同時に追及できる場として「自ら語り、そして同時に語りに立ち会う」場の設定に思い至った。

何らかのテーマをめぐる「語る」という試みは2007年度の学生とともに「恋愛」を取り上げることをして一定の成果を上げている（小山他2008）。そこで目指されたのは、自分たちの中にある「当たり前」を俯瞰し、その感覚が場合によって排斥する他者の存在に想像力を働かせたり、また逆に他者、他グループの「当たり前」感覚から排斥される自己の存在について認識したりすることであった。2009年度のメンバーにとって必要なことは何か、上記野口の文献の最終章を担当したメンバーがその中で提起されていた「言っぱなしの聞きっぱなし」を実際にやろうとして時間切れになったことを受け、次のような手順で語りへの立会いと語りの更新を試みることにした。総じてここで目指そうとするのは、各自が他者の語りに耳を傾けるときの新たな作法を習得し、その関係の中で自らの語りが更新されることを体感するというものである。

12月2日 学生による語り① 「将来」というテーマをめぐる「言っぱなしの聞きっぱなし」

の語り合い（二巡）（ICレコーダーに録音。以下録音とする。）

12月9日 石川茂子による語り（大学卒業から今日に至るストーリー）石川は、小山（教員）が1985～1986年まで勤務したA県の知的障害者更生施設B園にて同僚だった間柄で、その後も年賀状のやり取り及び数年に1度のメールによる近況報告程度の付き合いが続いていた。石川が2003年9月からウェブログをスタートして以来は、断続的な読者としての関係である。ウェブログは様々な可能性を秘めた新たな語りの場であると認識されており（山下他 2005、岡林 2009、池田他 2005=2006）、また石川が同ウェブログで追及するテーマ及びその文章表現に見る自己開示の姿勢と方法に対して敬意と信頼を抱いてきた小山（教員）が、学生が語りを深化させようとするにあたり、ぶつかり稽古の相手として招くことを発意し、了承されたため実現。（録音）

12月16日 今までの語りを素材に論文を構成する場合を例にした卒業研究に関する講義及び、実際にまとめたプロダクトを作るかどうかに関する話し合い。同時に石川の語りに対するリアクシ

ョンをB5に1枚で記したものを集め、その後石川に郵送。レスポンスを依頼した。年内最後の本授業終了後年明けの授業までの間に、メールにてメンバー同士若干のやり取りを経てまとめを文章にすることを合意。同時に石川からも共著者になることについて合意を得た。

1月6日 学生による語り①と石川の語り①の文字起こし原稿、及び学生からのリアクションを踏まえた石川からのレスポンス（「石川の語り②」と称す）としての文字原稿をすべてコピーしてメンバーに配った。「仕上げのプロダクトについて」というレジメを配り、再度本とりくみの内容について説明し、手順を相談した。

また、一連の語りとその分析とは全く別件の同時並行事項として、現時点での卒論テーマと仮の章立てを全員から集めた。さらに、これらの文字起こし原稿及び石川からのレスポンスすべてを踏まえて1月13日を締め切りに最終レポートの課題を出した。（課題①一連の語りに学んだ概念をどのように読み解くか？課題②あなたにとって「将来」とは何か？分量は①②で2000字程度とした。）

仕上げのプロダクトがもつ二重三重の目的

- ・ 卒論のイメージをつかむ
- ・ ゼミの仕上げのプロダクトを作成

- ・ 一連の語りとそれへの立ち会いを楽しみ、それが各自にもたらしたものを探る。あなたにとって将来とは何か)
- ・ 社会構成主義に基づくナラティブ・アプローチの考え方を踏まえて、目の前にある語りをテキストとしてとらえた時に見出せることは何か考察する。（ゼミでの学びを定着させる）

1月15日 補講 学生メンバーから提出された最終レポートの内容を踏まえ、小山が教員として自らを語る場を作った。(録音)

これら全体を通して素材として我々の前に確保された内容は以下の通りである。

- ① 学生の語り、一巡目と二巡目 (録音起こし原稿)
- ② 石川茂子の語りと学生の口頭によるリアクション (録音起こし原稿)
- ③ 小山 (教員) によるまとめのプロダクトと卒論に関する講義 (レジュメと音声データ)
- ④ 学生による石川へのリアクションペーパー (文字で13名分)
- ⑤ 石川による学生へのレスポンス (メールに添付、「石川の語り②」)
- ⑥ 1月6日の小山 (教員) による講義 (音声データ)
- ⑦ 学生による最終レポート (2000字×13名分)
- ⑧ 1月15日の小山 (教員) による補講での語り (録音起こし原稿)
- ⑨ メールによる小山 (教員) から学生メンバーに対する語りかけ、及び学生メンバーからの応答。
- ⑩ メールによる小山 (教員) と石川とのやりとり
- ⑪ 石川によるウェブログ²⁾

本報告は、上述のように二重三重の意図を持って、しかも生きて動いている授業プロセスの中でメンバー間の十分な相談と合意を踏まえステップを踏んで仕上げに向かったものであり、当初からまとめることを想定し、方法や手順を決めてあったわけではない。従って、研究としてみた時にやや不整合な部分はあるものの、何よりも授業進行の現実に丁寧に向き合うことを第一優先とし、全体を研究と実践が合体しているアクション・リサーチ的なものとしてまとめることにした (藤江 2007=2009, Kemmis and McTaggart 2006, Alston and Bowles 1998=2003)。

Ⅲ. 方法

文字データの分析方法については、素材によって以下の方法を組み合わせることとした。①の学生達の語りについては、文脈に十分留意をし、それぞれが前者の「何に」関連して、ないしは関連せずに「何を」語って行くかというシークエンスに留意しつつデータを説明し、パターンを見つける会話分析・ディスコース分析の方法を (鈴木 2007=2009)、④の書かれたリアクションについても記述内容をコード化するが、コンテキストの中で読み込み解釈すると言う意味で同様の方法をとる。⑦の最終レポートについては当初より課題を設定したため、「語りに学習済みのどんな概念を読み解いたか」と「各人にとって将来がどのようなものとして描かれているか」及びその他方法論への言及を指標にして分析する「small q」の方法を取る (山口 2007:311)。

一連の語りにおいて、②と⑤の石川の語り及び⑧小山 (教員) の語りも「語り」に参加した対等なメンバーによる内容として分析対象になりうるはずであるが、本報告においてはあくまでも学生にとっての授業成果の評価がメインの課題となるため、② (要約) と⑤はそのまま内容を提示し、また⑧は概観するにとどめる³⁾。

以下、語りと語りへの立会い、さらに語りなおしのプロセスとその内容を、分析及び解釈の方法そして結果とともに記す。

Ⅳ. 結果

1. 将来をめぐる学生の語り (一巡目と二巡目)

野口の著書第9章に説明されたセルフヘルプグループにおけるミーティングでの一手法である「言いつばなしの聞きつばなし」(野口 2002=2003; 164-168) を体感したいという希望の元、当該の章を発表担当した学生2名がファシリテートする

形で語り合いのテーマ選定から始めた。小山（教員）は録音をセットした後は後ろに下がって見学していた。10分程度をかけてゆっくりと全員が合意したテーマが「将来について」である。一巡目が終わったところで、小山（教員）が二巡目について同じように進めるのか若干の問いかけをしたものの、その後は再度背景に控えた。二巡目が終わったところで、教員も初めて学生メンバーの語

りに触発された自分の語りを短く行った。以下録音起こし原稿からキーワードと話の流れを読み取ったものをさらにシンプルに表にまとめたものである。①～⑬は同一人物を表している。なお、この回では、1名の病欠と1名の次年度新規参加者の見学があり、全体は13名となっている。病欠の1名についてはこの録音起こし原稿を見た後にメールにて将来を語るという形をとった。

表1 語りのキー概念と流れ

	一巡目	二巡目
①	福祉の仕事希望 将来は結婚、子どもも、幸せになる	福祉に決めたが、福祉に逃げているのか？
②	一般職探す（福祉がベース）	一般職に決めたが、いつ福祉をあきらめた？
③	福祉の中の介護職希望 周りの反対 迷い	職種選定にあたり、人の評価に振り回されている 自分も本当にやりたいのか？
④	福祉に決める しかし、適性あるのか？	社福学科なのに福祉職が少ないこと、周囲の一般職への就活当然視に違和感あり、本ゼミに福祉職希望が多いことに驚き 安心
⑤	一般職 vs. 総合職 転職嫌 専門職でスローライフ望む	公務員一本で行く
⑥	大学院進学後 福祉職へ	福祉職を希望しているが家族の勧めで大学院へ 少し迷い
⑦	一般職（金融）検討中 何年かしたら福祉職	福祉は仕事以外で、ボランティア等でもできる 金融と公務員の二本で行く
⑧	福祉職に決めた 不安もある	一般職に行かないのは自信がないから
⑨	今は一般職で 根底に福祉の理念のある企業を探す	他の領域目指した高校時代 実は福祉に興味なし 隠してきた 一般職希望
⑩	福祉職を希望 一方親の勧めで一般職も検討中 ミーハーに領域選び	めざす福祉職の探し方、とりあえずやっている一般の就活 世の中を甘く見ている？
⑪	福祉職 でも何で？に答えられない	福祉職を何でやりたいのか再考するつもり
⑫	一般職で就活 どこも皆「良く」見える 本当に何がやりたいのか？	自分が本当にやりたいことがなくてはならない 就活でも人に伝わらない
⑬	福祉職希望した しかし親の反対で一般職の就活	一般の就活も福祉職の追求も態度としては今ひとつ 学生身分に甘えか？

「将来」というタームにかけて、ファシリテーターである語りだしのメンバーは次のように口火を切った。

…私は今のところ、将来は、福祉関係の仕事につきたいなあって思ってるんですけど、何かまあ具体的にどういう方向に行こうとかまだそんなに決めてなくて、で、まあ、徐々に考えていけばいいかって感じなんですけど、で、うーん、結婚とかも出来たら良くなって思ってるし、こどももほしいし、何か幸せな人生を送りたいなあって思ってます。(大塚明佳)

福祉関係の仕事ということと、しかし分野や中身はこれから決めるということ、さらに結婚や出

産を含めた幸せな人生という大きな部分に触れている。しかし、その後連続して行く語りにおいては、ワークライフバランスを含む長期的な展望というよりは、目前ないしは渦中にある就職活動に強く関連づいた内容が語られていった。

全体のトピックとしては、①社会福祉職⁴⁾を目指すのかもしれないもしくは一般企業をめざすのかという二大選択の間での迷いや葛藤（ここには派生する選択肢としての大学院や他大への進学もみられた）、②どちらの選択肢を選ぶにせよその確信度合いについての自省、③就職活動への態度そのものについて自己批判する内容が大きなところであった。以下にトピックレポトリと語りの例を挙げる。

表2 全体に見るトピックのレポトリ

トピック	内容例	解説
福祉 vs. 一般	福祉関係の仕事につきたい。 福祉職と思ってきたがやっぱり一般。 福祉の理念が活かされた一般企業を探す。	13人の中で院の後で、も含めると8人が福祉職を表明。 4人が一般企業、1人が公務員を表明した。どちらにせよ選択の理由を表明。
確信度合いへの自省	福祉選択の理由が言えない。 自信がないから福祉。 福祉に逃げている。 介護職を反対され迷い。 福祉に適性あるかどうか不明。 いつ福祉をあきらめた？	福祉・一般どちらもそれを選んだことを控えめに言う雰囲気には自分の感覚を押し付けたくないという気持ちがありか？
就活そのものへの態度反省	社会を甘く見ている？ 学生身分に甘えている？ 何が本当にやりたいのか言えない。	福祉と決めても一般企業を「何となく」探っている態度や、一般と決めても多くの領域を検討することに定まらなさを感じている。

二巡目が終了したところで、小山(教員)の語りを短くはさみ、次週の進め方として、石川の語りの後、各自の「取っ掛かり」を手がかりにスピーカーの語りを受けて自身を短く語ることを決めた。

2. 石川茂子の語り

(1) 知的障害者施設での仕事

石川は1985年に日本福祉大学社会福祉学部を卒業し、すぐにA県の知的障害者更生施設B園に就職した。

石川 年表

1. 知的障害者施設での仕事

1985 日本福祉大学 卒業
知的障害者の入所型更生施設に就職
(小山が1年間在籍、同僚として勤務)

1987 結婚

2. 国際交流の仕事

1990 地方自治体の外郭団体に転職(国際交流の仕事スタート)

3. 組織改正による所属先の変更

(1) 激務

1995 組織改正のため事業の改廃があり別団体に転職という形の異動

1999 男女雇用機会均等法の施行と同時に労働基準法的女子保護規定の撤廃があり、女性も深夜10時以降の残業が認められ、常態化。

(2) 経理担当

1998 国際交流事業の縮小に伴い、総務課の経理担当へ異動
土日もしばしば出勤するような勤務のかたわら年に6~7回海外旅行をする。

1998 昇格試験を受けて主任に昇格

(3) 国際交流課へ異動

2001 希望が通り、国際交流課に異動
地域国際化事業(外国人向けのリレー専門家相談会等、在住外国人支援事業実施)

(4) 所属財団が株式会社化

2003 財団法人の株式会社化にともない公益部門であった国際交流事業が廃止となる。

2003 営業に異動し8月末まで勤務した後、退職

4. 退職と家庭生活

(1) 家の片付け

2003 ある市の国際交流協会の職員採用試験に応募し、結果は不採用となる。

専業主婦となり、自宅にある不要な物を大整理。

料理教室に通う

ウェブログをスタート

(2) 次なる活動の模索

2003 起業セミナー、ヨガ、整体、異業種間交流等に取り組む。

児童文学を書きたいと希求したが書けず

5. 再就職

2006 8月よりある大学の在住外国人支援にかかるセンターに総務職として就職

2008 3月末で退職

6. 渡英

2008 7月よりインターンシッププログラムに参加し英国に滞在。(1年間)

イギリス公立小学校で小学生に日本語や日本文化を教えるボランティアとして働く。

2009 7月帰国

具体的な、技術的なこととか、何か自分がこうしたいという対象があったというようなことで社会福祉を選んだんじゃないかと、私はいつも自分は成長していきたくないと、思ってたんですね。それで教育とかまあ福祉っていう分野は、自分が働きかけることによって自分を成長させてくれる分野なんじゃないかというようなことを考えてこの学問を選んだような人だったので、で、そういうゼミも選んで、働き始めたのが知的障害のある成人の入所施設ということで、最初のころとっても悩みました。あの、覚えてらっしゃるかしら（小山に向かって）。私は「労働の疎外について」という本を一生懸命読んでいた……。どうやったら労働の疎外が克服できるかわかった？って小山さんが（言った）……。その小さな入所施設というところで三交代の勤務で働いて毎旦生活の介助をするって仕事はその、自分をすごく小さく小さく限定してしまうような気がして、最初とってもあせってて……

更生施設では、比較的重度の障害がある利用者への日常生活の介助がメインの仕事である。石川にとって利用者が施設を出て就職や地域生活といった違うステージに上がって行くという姿が非常に見えにくいという現状がつかく感じられた。

今思うと、私が目指していたのは私も自分自身に「常に成長し続けなければいけないんだ」という思いを持っていたので、ただ毎旦生活をしているだけじゃ、毎旦食べて寝て、ちょっと遊んでっしてしているだけだったら、人間として生きる意味ないんじゃないかくらいに思ってしまった、その生活を介助することにあんまり価値を見出せなかったんですね。今思うと、そこで見ていたのは、その場で暮らしているその人そのものじゃなくて、あの人が言葉がしゃべれるようになったら

どんないいだろうとか、この人が何か仕事ができるようになったらどんなにいいだろうとか、このひとが家庭に帰って、家庭内でも自立した生活ができるようになったらどんなにいいだろうとか、いつも今そこにはいないその人、もっと良いその人、もっと変わったその人ばかりを見ていて、今その生活を快適にするというようなことに全く目がいていなかったの、それでその生活介助が主になる施設の仕事をつかうてつかうてたまらなくなっちゃったんだらうなと思うんですけど。お勤めして5年目くらいの冬に、夫やその友達大勢とスキーに行って、その帰りに車の中で、上越かなんかに行って、その帰りに車の中でうとうとしてたら、〇〇では文化的な施設の職員や学芸員を募集しますって言うラジオが流れまして、何か募集って聞こえたって思っ、そのころ転職の試験ばかり受けていたので、電話番号ちょっとメモしてとかいって……

(2) 国際交流の仕事

そうして石川は自治体の文化財団に転職する。

あまりにも突然な職業の変更だったんですけど、実はその頃は、中東、イランとかから来た移住労働者の方たちが爆発的に増えている時期でした。上野の公園とかで仕事にピックアップしてくれる人を待ってたくさんの人たちがいつもそこにいるようなそういう時代だったんですけど、そういうニュースを見るにつけ、外国人って言うのは日本にいと言葉とか生活習慣とか文化の問題でハンディを負っているって言う風に思っていたんですね。で、そういう人たちの援助ができたらいいなあって言うのは思っていたんですね。ニュース見ながら。でも自分が受けたところは全然そんなところじゃないって思っていたんですけど、行ってみたら自治体の高校や家庭が受け入れ

る、1年間受け入れるんですが、学校の関係の世話をしたり、ホストファミリーのお世話をしたり、というようなお仕事だったり、あと自治体の高校生を募集して試験を受けてもらって自治体との姉妹校都市に1年間ホームステイで留学するっていうそういうプログラムを担当することになって、まあ奇しくもちょっと興味のある分野に入ることができたんです。

諸外国から日本に来てホームステイしながら学ぶ高校生のために、受け入れ家庭との調整をする仕事では学ぶこと考えさせられることが多かった。

日本の家庭、日本人たちって言うのは非常に日本的だとか、自分達が一般的だと思っている人がやっぱり多いので、どこの国に行っても自分達のスタイルは普遍的に通用すると思っている人たちが多く、実はそうじゃないことたくさんあるんですが、それが外国人の高校生が1人家に入ったとたんに、いろんな形でトラブルとなって現れるんですよ。で、それをその子が日本のことを知らないのが悪いという形で裁く人が非常に多かったので、ホストファミリーとのやりとりでも大変勉強しました。例えば、お風呂、皆さん知っていらっしゃると思いますけど、バスタブのお湯をみんなで使うってことはとても日本特殊なことですし、皆さんもホテルとか使ったことあるからお分かりだと思いますが、すごく不潔って思うこともあるわけですよ。でも1年もいればね、この方がずっといいね、暖まって、って言ってみんな好きになって帰って行くんですけど(笑)。そういうようなこともありますし、男言葉と女言葉があるけど、お母さんとばかり接していて、男の子が女言葉を覚えてしまうと、それ正しい日本語なんだけど、正しくないとかね。あと、直訳日本語、

例えば先生に向かって「あなたさ」って言ってしまっ、先生がすごく頭にくるとか。まあすごい小さなことですけど毎日生活して行く上では積み積み積もって、トラブルになることもあるんですね。でも皆さん日本の方はそれを口に出して言わないし、それが違うからそうしてるんだと思えば、これはこういうものなんだよ、こういうふうに感じるよってことを説明できると思うんですけど、相手が常識がないとか、遅れているとか、そういうふうにと考えると、ただ不快な気持ちをためていくだけで、言葉にもしないので、深刻な形で決裂する、そして家庭も替わるっていうようなことをたくさん経験して、日本の人のコミュニケーションの仕方とか、あと母語や母文化を持っている側の圧倒的な強さっていうことに気がつけるか気がつかないかっていうようなことをその、担当7年やらせてもらったんですけど、本当に学ぶことが多いプログラムでした。

(3) 組織改変による所属先の変更

その後、当該団体は、組織の都合で、事業が離れたり改廃したりということがあり、国際交流の仕事そのものは別組織の国際交流財団に移ることになり、石川は意図せずまた転職(移籍)ということになった。

1) 激務

企業とか他の場所で仕事をしてきた人たちをたくさん中途採用した財団で、当該施設をこれからどうやって売っていくかっていうことがメインの仕事だったので、国際交流事業が非常にお荷物的にとられてしまったんですね。皆さんがまあそういうふうには思っていた。その中途採用の人たちって言うのはすごくよく働く人たちで、うまく言えないんですけど、当時の民間企業では皆さんそうだったのかもしれないんですが、毎日毎日12時、

1時過ぎるまで働くのは当たり前、休暇も土日もとらず、年休どころか代休もとらず、ただただ働き続ける方たちが圧倒的で、女性も男性も。で、そのころ男女雇用機会均等法だったか何だか忘れましたが、途中まで女性は10時までかな、22時以降の残業はしてはいけないって法律あったんですね、ずっと。だけど、それが廃止になってしまって、男女そんなに違わない仕事してるんだから、みたいなかたちで廃止になってしまったんです。それをウエルカムって歓迎するムードが女性社員の間にあったので、心底驚いたようなわけなんです。

2) 経理担当

当時の激務に加えて、石川は部署の異動も経験することになった。

その国際交流事業も、ですから形だけなので、事業としてはずっと続いていたんですけど、段々縮小縮小って予算も規模も縮小していった。で、私はその間に部門の間で異動をしまして経理を・・、総務課で経理を担当になりました。実は私、算数と名のつくものだった時代から、本当に数字が苦手で、今でもモノを買って暗算とかほんとにできないんですが、まあエクセルとかありますから仕事は出来ますけど、やっぱり数字に対する勘が悪いので、それこそ私も毎日、12時15分に・・・夜のね、勤め先を出れば何とか家に帰れる人だったんですけど、それさえ乗れずにタクシー帰りっていうようなことを繰り返すような仕事を3年くらい続けましたかね。

もともとの激務に加え、苦手な職務内容に取り組むことになり、ずっと働き続ける生活が何年か続くのであるが、それにもかかわらず、ないしは、だからこそ、海外旅行をしたくなり、年に6~7

回出かけたこともある。

そんなに残業とかしてたので、全部はつきませんでしたけど、まあお給料もたくさんもらうじゃないですか。もらってたんですね。それをまるで飛行機から撒くように海外旅行してたと・・・。ほんとに実りの少ない生活だったと（笑）思うんですけど。

3) 国際交流課への異動

その後石川は、主任昇格といった過程も経つつ、再度国際交流の仕事に戻る事が出来た。ただ、高校生の留学事業は終了しており、在留の外国人向け支援の仕事を手がけることになった。

東京に住んでるたくさんの外国人の人たちが、言葉が出来ないとか、特に専門的な言葉が必要な法律の相談とか医療の相談とか、そういったことで大変な思いをしているから、東京って言うのは、幸いなことにいろんな国に住んだことがある人がいて、いろんな言語が出来る人がけっこう潜在的にいて、そういう人たちを掘り起こして、ボランティア通訳の制度を作っていきたいなっていうそういう人たちの掘り起こしの場として都内でリレー相談会っていうのをやったんです。弁護士会とも協力して・・・

(4) 退職と家庭生活

この事業は忙しく、また興味深い仕事であったが、勤務先が株式会社化することになり、国際交流部門そのものが廃止されることになった。その後石川はそこで営業職として数ヶ月勤めるもののある自治体の国際交流協会に新規の募集があることを聞き、応募して結果が出る前にそれまでの勤務先を退職することした。しかし応募先の結果は不合格と出る。

1) 家の片付け

私はその不合格通知を見たときに、「あ、収入ゼロになりました。」って（夫に）いったら、まあしょうがないねってことで、それから3年間、私はあれを専業主婦と言っていいものなら（笑）専業主婦をやりました。

で、8月末にやめたのに、すぐに友達と、ちょうど同じ頃にやめた友達がいたんで、インドスリランカの旅行とかしていたので、やっぱりあまり家にいなかったんですが、家にいるようになって1番わたしのつらかったのは・・・、家がものすごく汚かったんですね。（笑）ゴミ屋敷ではなかったんですけど（笑）。あのね、住んでるところって、普段見てない・・・、さっき言ったように、寝るだけに帰ってたでしょ、だから寝るだけに帰ってる分には別に困らなかったんですけど、1日いてみると、何ていうかすごかったんですね。ある一部屋にモノをたくさんおしこめて納戸部屋にしてた部屋があったんですけど、そこにトイレトペーパーが、なくなったと思って買い置いたトイレトペーパーがどのくらい出てきたかな、何しろそれから3ヶ月か4ヶ月買う必要がなくなり、あるのを忘れては買い、あるのを忘れては買い、あるのを忘れては買ってしてたってことがわかって、一事が万事っていうか、着ない服たくさん、読まない本たくさん、使わないモノたくさんうちにあって、生活するのは、ほんとにね、食べる場所と寝る場所で、すんでたんだなってことに向き合うわけです、3年の最初にね。で、1ヶ月もかかってまあ家の中を片付けたのが最初の試練というか仕事でしたな。

2) 次なる活動の模索

その後の家庭生活では以前から続けていた料理教室での学びを深める等意義深いものであったが一方精神的に苦痛も感じるようになる。

ただ私はやっぱり自分は、「人間は成長し続けなければいけない」っていう呪縛からそのころも逃れていなかったんで、何もしないでうちにいるってことにやっぱり精神的に耐えられないところがあって、当時すごくブームだった起業のセミナーとか、それからヨガも習いに行ったり、あと整体とか、ありとあらゆることに手を出した。異業種間交流セミナー、交流会っていうものにも、もう何回となく出ていたんですけど・・・

石川は小さいころからイギリス児童文学が大好きであった。5歳で父親を亡くし、その後の生活にはある種の制約があったが、児童文学が自分を育ててくれたという思いが強く、自分も子ども達が生きて行く糧になるような物語を書けたらという望みを持つようになった。しかし、実際はなかなか書くというところには至らない。

で、起業セミナーとかに行っても自分はそういう方（児童文学を書く）に進みたいなって、思いながらそういう聞いてたんですけど、その3年間とっても時間があったってうちにいたはずなのに、ほんとに1文字も何か書こうって事が出来なかったんですよ。何でなんだろうって、今は少しわかるんですけど、職業がないのであれば、何か人に認められることをしたいってやっぱ思っていたんです。だから起業セミナーとか一生懸命出て、私は何々をしていますって言う何かを持ちたかったんだと・・・、その方法に文学とか物語を書くって言うことを使おうとしていた。自分が書きたいことがあって、表現せずにはいられないっていうのではなく、人に偉いとか、立派だと思ってもらおうという思いが先にあったら1文字も書けないんですよ。

(5) 再就職

その後、国際交流の仕事をしていた頃のつながりで、在住外国人との共生のための教育研究プロジェクトのセンターで総務の仕事につくことになった。そこは、在留の外国人支援について研究する5年時限でできたプロジェクトで、在住外国人児童の学習援助ボランティアを募集し、学習支援のコーディネートをしたり、研究者や実践者が協働で研究する場作りをするような事業を行っていた。しかしそこでの総務の仕事は石川にとってあまり役とは言えなかった。

そこでやっていることはすごく興味深いことだったんですが、私が担当しているのはそれぞれ文房具そろえとか、会議のために集まっていた方たちに通知をして、お金を用意して、謝金っていうんですけど、会議室を押さえて、会議に必要な機材をそろえてってそういう仕事をずっとしました。まあ、そうしてるとですね、そこで勤めている人たちは英語はもちろんのこと、ポルトガル語が出来たり、ドイツ語が出来たり、そして専門的な、まあ研究者の人も多かったですから、そういう人たちで、その人たちの事務を一手に引き受けるんです。すると往々にしてですね、言われたことをやってればいいんだみたいな、扱いは受けるわけです。自分に専門性がないとか、そこでいえば語学、勿論重要なスキルである語学の力がないとか、それからまあその経験がない、在住外国人支援とか異文化とかそういうことを考えるに当たってほとんどの人は留学経験があったり、海外で仕事をした経験のある人たちがそこにはいたんですけど。ほとんど、というか私以外全員だったと思うんですけど、そういう経験が全くないということに非常にいづらい気持ちになるというか、自分を劣ったものと感じて、それがつらかったんですね。

(6) 渡英

3年の約束で勤めたものの、2008年の3月一杯で退職をし、同年7月から石川は、1年間インターンシッププログラムに参加という形で渡英することとなった。ホストファミリー宅に滞在しつつ地元の小学校で日本語や日本文化を教える仕事である。行くまでは大変不安であったが……。

行ってみたら、イギリス良かったんですね。いろんな経験する人がいると思うんですけど、私が一番あっちに行ってよかったと思うことの核は、ホストファミリーに……、最初2ヶ月は語学学校のホストファミリーにセントオーバースってロンドンから15分くらいの町でお世話になってたんですけど、その後の11ヶ月はコベントリーっていう、昔自動車生産で有名だった、ランドローバーっていう会社があったところなんですけど、そこで11ヶ月お世話になって、ご夫婦2人のおうちだったんです。お母さんのジュディさんのほうは私がお世話になった学校のナーサリーって1番下の3~4歳のクラスの先生だった方で、今は教育委員会みたいところでアドバイザーをしてるって方で、だんなさんのほうは、ランドローバーのエンジン開発の技術者って方だったんですけどね。その方たちと一緒に暮らしてほんとによくイギリスのこと英語のこと、こどもたちのこと教育のこと教えていただいたし、1番良かったのは、ジュディって人は自分と9こしか違わないんですけど、ほんとに道理のわかったおかあさん、sensible mumって呼んでたんですけど、どんなことを聞いても適切なアドバイスが返ってくるんですね。自分の友達との事とか、こどもに教えた時に起こったこととか。

文化の違いの中で、子ども達にした対応が間違っていたのではないかと思うような場面に関し

でも適切なアドバイスをくれて、大きな学びを得ることになる。

私はボランティアだったので、遠慮もあるし、日本人の発想って言うていいかわからないんですけど、子どもが全然言うこと聞いてくれなかったら、自分の指導力の問題なんだって割りと自分を責める、私はそういう人だったんです。でもまあ罰しなければいけないってことで、そのグループの中で全然言うことを聞かなかった子を、母教室の担任の先生のところにお返しして、それで授業を続けたことがあって、そのことを授業が終わった後でその先生に、私の指導力がなくて、あの子をちゃんと指導できなくてすみませんでしたって言う風にいったら、その子が途中で帰って来たことに先生は気づいていなくて、それくらい移動が激しい、小グループでの取り出し授業がたくさんあるので、よくわからないんですけど、先生がすごくそれを問題視された。その子にも怒ったし、向こうの学校は親が毎朝毎晩送り迎えするんで、お母さんにも伝えて、ジョージってその男の子がすごく泣いて、私は何てひどいことしちゃったんだろう、告げ口したみたいだってすごくショックを受けて帰って、そのことをジュディに、今日こういうことがあってって言う風に話したら、先生の先生とか新しい先生、また先生が休む時に臨時で来る先生って言うのは、子どもたちからやっばり試される、子ども達はそういうことをして、先生がどの程度出てくるかって言うのを試すんですって。で、何かそういうことがあったら、ホントにちゃんと叱らなくちゃいけないし、本人にわからせなくちゃいけない、何かしたら何が起るのかって言うことをわからせなければいけないから、そのときに取った担任の先生の対応も、担任の先生がそれをお母さんに告げたことも、全部正しいことです。あなたは何も自費の念にさいなま

れることはありませんって言うふうに言われたんですね。で、日本的な発想でいろんなことを考えていると間違っちゃうんです。そこの場で大事にされていること、そこの場で当たり前であることって言うのを一生懸命見て一生懸命感じ取ってそしてそれをまねる、自分もそれを尊重するっていうことを早いうちにそれが大切だってことに気がつかせてくれ・・・

また、何よりも良かったのは、包み込まれるような家庭の温かさを体感したことである。

お父さんのジェフのほうは、ものすごく寛容なというか、なにがあっても、どんなに遅くなっても車で迎えに来てくれるし、あんまり細かいこととかは言わないんですけど、最後は絶対守ってくれるって言う感じの、まあそういう意味ではすごい甘い人だったので、娘に甘い・・・。父親って言うのは娘に甘いんだって事を私は、父親を5歳で亡くしているのだから知らなかったんですけど(笑)、こんなに甘やかされるものなのかって、ほんとに心地のいいものですね、甘やかされるって言うのは(笑)。甘やかされることの、何ていうのかな、嬉しさって言うのを知ったし、父親と母親の愛情って言うのはこんなに違うんだ、皆さんね、もしかしたら皆さんご両親そろっているお家に育ってらっしゃるかもしれないけど、そんな当たり前なことでも考えたこともないと思うんですけど、わずか11ヶ月両親そろっている家庭にいた私としては、父親って言うのは・・・私は acceptable dad って言うてたんですけど、ほんとに寛容で、で、やりすぎるくらい甘やかそうとするからお母さんが、やっば、びしっと、それはダメでしょうみたいな、入るんでるけど、何でも話すのはお母さんのほうで。で、適切なアドバイスをしてくれるのもお母さんのほうなんだけど、最

最終的にそれを全部お父さんは知っていて、必要なところは全部カバーしている。

こうして、当初考えた路線とは違う形で現在を過ごしているが、それに大変満足しているという語りで石川の話は結ばれた。

家庭とか両親の愛情っていうものを経験できて、そのなかで イギリスの文化や社会、教育、英語って言うことを学ぶことができた1年は、私の人生で一番幸せな1年だったんですね。で、帰ってきて今何もしてませんが、何もっていうか職業についていませんけど、家にいてお料理作ったり、お掃除したり、ってことが初めて楽しいと思うようになったんで、そういうおうちに11ヶ月いて毎日6時半から7時の間にお夕食食べて、それから10時までリビングにいてテレビ見たり、お話ししたりしてっていう暮らしをね、家にいるのが一番好きで、家族が1番会いたい人で、っていう心地よさを経験できたことが何か良かったなって。そう思うと、そのセンターで非常に強くコンプレックスを刺激されて、じゃあ条件があるならコンプレックス持ったままでいるよりも、行っちゃおうって思ってたことがほんとにラッキーだったなと思って、っていうのが私の今まで経験したことのお話です。

2. 学生から石川へのリアクション

よせられた13名分を何回か繰り返し読んだ後に、ディスコース上の特徴、ひっかかりになるところに番号を振り、順にリストアップしていった。つけたコードは石川への謝辞から始まって、暫定的に40分類、132項目となった。それらを通読の後、大まかな上位概念にカテゴリー分けし、分散していたものでそこにはいる項目を移動させた結果、全体が11カテゴリーとなった。相互の関連を

考慮しつつ上げると次のようになる。

- ① 謝辞 (17)
- ② 直近の就職活動における不安 (8)
- ③ 石川の話が参考になったり、触発されたりしたこと (40)
- ④ 石川の経た多様な経験の指摘 (6)
- ⑤ 転職や移籍へのネガティブな見方 (9)
- ⑥ 転職(多様な活動興味)へのポジティブな視点 (6)
- ⑦ 自分の性格や考え方の傾向指摘 (9)
- ⑧ 成長志向や積極性について (11)
- ⑨ 将来をめぐる「正しさ」について (7)
- ⑩ 出会いについて (7)
- ⑪ その他 (12)

上記カテゴリーの構成を全体像として大きく捉えると、学生メンバーは石川に「感謝」し、「今直面する様々な不安」を表明し、自分たちの持つ「性格や考え方の傾向」を自覚して言語化しつつ、石川の経た多様な経験や考え方を印象深く受け止め「参考にしたり、触発されたり」したということになる。特に2009年の12月現在、就職先を決定するプロセスにあって石川の経てきた経験に照らした時に「転職、移籍」に対して抱いてきたイメージや価値観がプラス、マイナス両方ともに表明されている。

こうした流れの全体像、特に転職や移籍に対して抱く両面価値を縦軸に配置し、その関連で語られたいくつかのタームと抱き合わせで十字に切った縦軸の上下に配置したのが図1である。横軸には縦軸上の感覚や価値観をもとに行動することへの自己による肯定と否定を対置した。肯定は「楽しむ」、否定は「不安がる、悲観する」といった感覚とも地続きのものにとらえて併記した。

上記カテゴリーの中で、「石川の語りが参考に

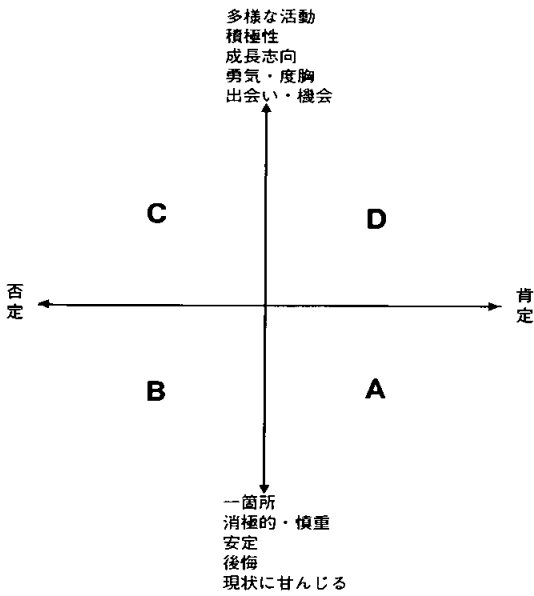


図1

なった、触発された、刺激や励みになった」という③カテゴリーの項目が40と最も多いところから、その部分に関する反応を中心に再度この4象限を指標に、学生が各自の現状をどう見て、またどのようにこの先を表明したかを読み解いた。

(A→D型)

・現在の就職活動を経てついた先が「人生」になると思ってきたが、道は決して1本しかないわけではない、興味の対象も1つでなくて良い、とした。今決めている道で合わなかったらという不安が強かったが、その場合は無理に続けることはないと心が軽くなったことを表明。

(A+B→D型)

・現状に疑問を感じてもそれに甘んじてしまう性格を自覚し、同時に骨を埋められる職場(=転職を嫌う)を探したいという気持ちもあるが、今後は積極的に様々なことにチャレンジするとした。足かせが軽くなったとも表現。

(B→D型)

・慎重派でやる前からあきらめることのある傾向を自覚し、それは可能性を縮めていることと表現。今後は様々なことにチャレンジしたいと表明。

(A+B+D自覚型)

・良くも悪くも一度決めたら最後までやりぬき、日々成長を求める自己を言語化し、もう少し柔軟な考え方への移行を表明。

・転職が人生プランの中になかったが分岐点に立った時にはひとつの選択肢と表明。

(AからDを見据えつつAにとどまり型)

・安定を理想ととらえる面を言語化、同時にそのようなものが手に入るのかという不安表明、色々な可能性を考えてもいいのだと感ずること、しかし考え方の根本は変わらないと表現。

・石川の状況をD象限ととらえ、純粹にそれをすごいとプラスの評価。(自己の行動についてはAにとどまる可能性も感じさせる文章)

(D型)

・不安はあるが若くやり直しはきくので自分が決めた道を信じて行くという表明。本当にやりたいことを明確にするために積極的に行動するという表明。

(自分のいる位置を表明せず石川の示した語りの姿勢に共感型)

・将来への不安の中で、石川の語りが押し付けがましくなく自然体であったため、話がストンと落ちた。

・単に自分の物語を順番に語っただけなのに自分に意欲がわいてきて不思議と表明。

全体を通して伺えるのは、真面目に自分の適性と意向にフィットしたことを見つけて長くそこで努力して行くという「健全な」方向性をもつことである。しかしそのような方向で進もうとしても、

見合った職業が見つかるかどうかにおいても、またそれが継続可能かどうかにおいてもいずれも保障がないことへの不安とセットになって、場合により彼女達の手足を縛る感覚が表現されていたと考えられる。選んだ道が「正しい」かどうかということについて視点の変換を表明したのは落合である。

私は今、本当にやりたいことは何なのか模索中で、周囲からのプレッシャーも加わり、正しい道を進まなければいけないという考え方をしてしまっていたように思います。正しい道と言うものはなく、正しいかどうかを判断するのは自分であり、修正できるのも自分なのだと思います。これから進んで行く方向が正しいと思っても、実際に入ってみると間違えていたということだってありうることです。正しくなくても自分のとらえ方によって正しくなったり、少しずつ環境を変えていくことで、理想に近づけるのだと思いました。(落合歩)

図の横軸に対置した肯定、否定という判断は、落合の述べるような「正しさ」概念の再考を経るなら、道の選択決断の後に訪れる具体的な「結果」をどのように主体的に引き受けるかどうか、ということと大きく関わるのではないだろうか。

4. 石川の語り②

学生からのリアクションは、そのまま石川に郵送し、それに応答してもらう形で以下の文章を得た。

皆さんからの感想のコメントを読ませていただき、それぞれの方が、私の話の中から自分に必要なメッセージを受け取ってくださっていることを感じ、大変うれしく思いました。その中でいくつか、特徴的な感想があり、それを読んでまた私の中で思いだすことや改めて考え直したところがあ

りますので、二点についてお話したいと思います。そのうえで私の将来について、今考えていることをお話します。

みなさんの感想の中で多かったものが、「転職を繰り返していることに驚きを感じた。自分は就職したらずっとその職場で働くものだと思っていたけれど、もっと柔軟に考えていいのだと思った。」というものでした。実は私も「一つのところに就職したら、ずっとそこで働くものだと思っていた。」人間の一人です。また、女性といえどもずっと働き続け経済的な自立が必要だとも思いました。それが結果的に転職を繰り返したかようになってしまいましたし、今は無職となっているのですから、なかなか最初に思ったようにはことが運ばなかったと言えるでしょう。ですが、それでよかったのだと今は思っています。

最初の就職が三交代勤務の障害者の生活施設の指導員でしたが、結婚しても子どもができてもしっかりしようと思っていました。それこそ、悲壮な覚悟で・・・。

25歳(就職して2年目)で結婚したので、夫となる人から「その仕事は辞められないの?」と結婚前に聞かれ、「女性の仕事を単なる腰掛のように考えているのか!」と結婚を考え直そうかとまで思ったこともありました。その時私の未熟な考えを諭してくださったのが、小山さんで「結婚生活と三交代勤務とがあなたにとってとても負担だと心配してそう言ってくれたのではないの?」と言われるまで、彼の思いやりに気付きませんでした。彼に「そういうことだったの?」と聞いたところ「そんなこともわかってもらえなかったのか。」と落胆されたのを覚えています。

考えてみたらこの結婚も、自分の人生設計とはだいぶ違っていました。卒業のころは、仕事をして食べていくだけでなく、理論的な勉強と現場での実践を自分の中で結合させて研究し、最終的に

は発表して世に問うような働き方をしたいと思っていたのでした。「ただ、働くだけで終わりたくない。」と思っていたというのが、今思えばなんともお恥ずかしいところで、自分を特別な存在だと示したくて仕方がなかったのです。大いなるコンプレックスの裏返しでした。

その野望を実現するためには、仕事に集中する必要があるから、結婚は30歳過ぎてから考えようと思っていました。ところが結婚につながる出会いは思いのほか早くあり、早く一緒に暮らしたいという一心で早々に結婚を決めてしまいました。そしてこれも思いがけないことでしたが、結婚したら不自由になるところか、一層自由が拡大して、私がしようと思えば、どんな挑戦も出来るようになったのでした。経済的、精神的に一人でないということが、選択の自由を拡大してくれたのでした。これも思い通りに行かなくてよかったことのひとつです。

結局施設での仕事では「ここにいっても勉強にならない。」と結論を出し、転職を選びました。この転職理由も、私の「成長願望」がなせる技だったのです。

転職した時も子どもができてみずっと続けられる仕事をしようと思い、公務員労働に近い男女同一労働の職場を選び、職住接近のため、松戸市から都心の品川区に引っ越しをしました。子どもができて働き続けられる環境を選んだのです。夫も田町で勤務していたので、夫婦ともに通勤時間だけはとても短くなり助かりました。ところがここでも思惑通りにはいかず、結局子どもは授からず、夫婦ともにただただ都心で働き続けて今に至るのです。

就職を決める時も、転職を決める時も、決していつ辞めてもいいと考えてしていたわけではなく、それどころか女性が一生働き夫から独立した収入を得るのは当たり前だと強く思いこんでいた

私です。

でも状況の変化やそれにつれて自分自身も変化していき、気がつけば何度も転職をし、仕事の中身も種類も変わり、それにつれて興味関心も移り、今では異文化間交流やコミュニケーション、そしてイギリスを中心とする児童文学に大きくシフトしてきました。そこから生まれた夢の実現のためには、必ずしも職業に就く必要がなくなったのです。

友人知人も、同じような関心を持つ人々が増え、気がつけば国内外にいつでも話せる友達がたくさんできました。夫は相変わらず、私が新しいことを始めるのを、楽しみながら応援してくれています。

最初に思った通りにならなかったことが、今の自分にとってとてもよかったと思えるのはありがたいことです。思い通りに行くことばかりが幸せではないし、全てのことは必要があって起きたのだと、後から思えると、今では思っています。

そしてもうひとつ。皆さんのほとんどが気にかけてくれた言葉に「成長し続けなければいけないと思ってきた。」と私が繰り返したことが挙げられていました。「成長し続けなければいけないという呪縛」とも表現しました。何人かの方がとても共感してくれて、自分にも同じような気持ちがあるが、そうしなくてもよいのかと気が楽になったと言ひ、また何人かの人は「そういう気持ちがあったから、常に新しい挑戦ができたのでは。」と肯定的にとらえてくれていました。私はこの言葉を自嘲的に使ったのですが、肯定していただいたことには驚きました。

なぜ「成長し続けなければ」という強迫的な思いを抱き続けたのか。それは自分をありのまま肯定できなかったからではないかと思います。自分の今を肯定できないで、常に先を見て「もっと優れた」「もっと有能な」「もっと人の役に立てる」

「もっと人から尊敬される」自分になりたいと思いつけたのでした。専業主婦になった時私が友人に「私には人に言えるような、何の実績もないし、所属も肩書もないことにとて不安や焦りを感じる。」と言ったことがありました。すると友人は「そんなの当たり前でしょう。ほとんどの人がそんなじゃない？」と呆れられ、初めて自分は特別な人になりたかったのだと気がついたのでした。

今のままの自分では嫌で、いつも「足りないもの」「未熟なもの」「未達成なもの」「劣ったもの」という風に自分を考え、それを否定するに足る何かを得ようともがき続けていたように思います。それが「仕事で組織の役に立つこと」だったり「起業すること」だったり「児童文学作家になる」ことだったりしたのでした。

人に見せるための「形」を求め続け、自分自身を見つめ、認めることがずっとできませんでした。そのことへの反省が「成長し続けなければいけないという呪縛」という言葉になって私の中にありました。でもそうしてもがいていた自分を否定することもまた、自分を受け入れられないことだったのだと、皆さんの感想を読んで思ったのです。

そのような満たされない思いがあったからこそ、興味の向くまま、コンプレックスを打破したいという思いに突き動かされて、イギリスまで行ってしまったわけで、そして結果的にはそれが自分をとても幸福にしてくれたわけですから、その呪縛もマイナスばかりに働いたわけではなかったのです。

ただその思いに突き動かされて進んできたことがわかった今、もう「人に見せるための自分」や「誰かに評価されなければ存在価値を見いだせない自分」を卒業したいと思っています。

創作ということに向かおうとする時、人の評価を求めている、決して自分の中からわき立って

くるような表現は出てこないからです。もちろん、創作のためだけではなく、自分を好きになり、そのままの自分を肯定できなければ、渴望感やコンプレックスで何かを得ようとするでしょう。そうして得たものでは、決して自分を満たすことができないとわかりました。逆にそれが一層自分の飢えや渴きを刺激し、終わることのない欲求となって自分を苦しめることを。何度も繰り返してやっとわかったのです。

さて、そこで最後に将来についてです。「将来」は私にとって、遠い未来ではなく「今」そのものだと思っています。今の生活を楽しむこと、味わうこと。家族と話すこと、友達と話すこと。そしてたくさん笑うこと。その延長線上に、どうしても表現したい思いが出てきて、それが創作という形になったら素敵だと思っています。私の「将来」は「今」を犠牲にして得るものではなく、「今」をないがしろにして味わえるものでもありません。丁寧な「今」の連続こそが、私の夢見る「将来」です。だから今の自分を限りなく幸せにすることが、今の私の最大の課題と言えるでしょう。ずいぶんわがままで自己中心的な考えだと思われるかもしれません。

どちらかと言えば私のこれまでの人生は「自分を後回しにして」「自分を犠牲にして」「他人の役に立つ」「喜ばれる」「評価される」ことばかりを望んできた人生でした。それが美しいと思っていましたし、そうやって人に評価されない限り、自分の存在価値はないかのように思ってきたのです。ところがそれは自分を人さまに預けてしまう考えですから、決して安心することができません。人の心は計り知れないので、どれだけ尽くしても相手の心のうちまではわかりません。ずっと疑心暗鬼が続き、感謝されないとって不満や不信を募らせて傷つき果てるといった、一人相撲を延々と取り続けることになりました。これでは疲れま

すし、どんな人ともうまくいきっこありません。どの職場でも行き詰ってしまったのも、この私の、決して満たされない他人任せの考えが原因だったのではないかと思います。

イギリスでの1年間のホームステイを通じて、相手に好かれようと緊張し続ける必要のない関係を知りました。きっと家族を通して多くの人はそれを知っているでしょう。私は実の親に対しては、ずっと緊張をし続けて育ったので、そのことに気がつくのがとても遅かったのですが、ホストファミリーのパイパー夫妻のおかげで、リラックスして自分を受け入れることができるようになりました。緊張のない関係の心地よさもわかりました。相手の思惑を気にしなくなった途端に、誰とでも心を開いてすぐに打ち解けられるようになったのです。私の将来は、だから「今」の連続。緊張のない心地よい自分であり続けることなのだと思います。

5. 一連の流れを踏まえた学生のリポート

(1) リストアップした概念と語りへの適用

もともと①学んだ概念への適用と、改めて②各

自にとつての「将来」とは何かに答える課題リポートである。分析においてはその両者を念頭に、リストアップされた「概念」(考え方)とその適用、解釈の仕方を抜き出し何に対してどのように当てはめ理解しようとしているかについて検討した。また、将来の語りについては当初の語り(自分達の語り一巡目と二巡目)からの変化を指標にしながら分析した。

1) ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリー

最も多くの学生が指摘したのが「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティブ・ストーリー」である。以下のような読み解きがみられた。

ドミナント・ストーリーとは、一義的には「私達の人生を制約する物語、人生の下敷きとなるような物語」(野口 2002=2003:80)である。ナラティブ・アプローチの考え方において学んだのは、自分の経験を枠付ける意味の固まりとしてのストーリーの中に人々は出演者として入って行き、また他者のストーリーの出演者にもなるということであった。(Epston, White 1997=2003:140)このように人生は経験をストーリー化し、それを

表3

	ドミナントストーリー	オルタナティブストーリー
1	就職したらずっとその職場で働く(転職は望ましくない)	転職を繰り返し、当初の人生設計とは違うことになっても、良い人生が送れる
2	人は成長し続けなければならない。	人の評価に振り回されず、今を楽しみ、心地良い自分であり続ける。
3	成長や評価に縛られるのは苦しい人生である。	成長を目指すからこそ多様な経験が出来、世界が広がる。
4	就職や進路に関しては、親からの有形無形の影響を強く受ける。(親のアドバイスを無視することは難しい)	親のアドバイスに従って安定した道に進むのではなく、不安定な道を進んで見たいと思う。
5	他者から認められる特別な存在となるべきである。	他者からの評価が低かろうと、自分の中での志望度を判断基準に進路を選ぶ。
6	社会福祉学科で学んだ後は、福祉職につくのが当然である。	一般企業でも社会福祉学科で学んだことが生かせる。
7	大学3年になったら一般就職の就活に励むのが当然である。	大学院をめざすなど就活をしないこともありうる。
8	将来について、様々な意見を踏まえて「正しい」進路を選ばねばならない。	将来についての悩みに答(正解)はない。(誰が見ても同じ一つの答はない)

演じることでその人自身のものとして定着するが、人々の知っているストーリーパターンには限度がある。それでも人々の人生が同じにならないのは、すべてのストーリーに含まれる不確実要素という穴を埋めるために各自が書き換えをしているからである。(Epston, White 1997=2003:147) この書き換えのもとにあるものがドミナント・ストーリーであるといえるだろう。

学生メンバーによって示されたドミナント・ストーリーの1、6、7は就職という直近にある将来を見据えた語りの中に容易に見つけられた支配的物語である。それが二巡に渡る語り合いと石川の語りへの立会いを経てそれぞれのオルタナティブ・ストーリーの表明に至っている。ただし、これらはゲシュタルト療法に言う図と地の反転のように、背景に「気づいた」というまでのことであり、今後の行動に変化がでるか否かについては未知数であるともいえる。それに対してドミナント・ストーリーの8は現時点における学生メンバーの中にある支配的物語を俯瞰しており、同時に生み出されたオルタナティブ・ストーリー「将来についての悩みに答（正解）はない」と言う表明は語りのその場（レポート記述の中）で受け止め自体を変えろという、まさにパフォーマンスなものである⁵⁾。4についても、親のアドバイスは無視できない強力な存在であることを支配的物語として認めたうえで、「それでもその意向にかつてのようには従わないで行くという気持ちもあることに驚きを感じる」という表明をしており、これは、「親の意向に従う（ことが安全だし正しい場合が多い）」というドミナント・ストーリーの中では、生きられた経験が十分に表されていないことの表明と考えられる。

2は、石川の語りの中に多くのメンバーが読み解いたドミナント・ストーリーである。しかし、このドミナント・ストーリーを何人かの学生メン

バーは、だからこそ多様な経験に向かって積極的に自分を駆り立てチャレンジすることが出来たと肯定的にとらえたため、石川本人が「語り②」においては、成長にこだわってもがく自分をも受け入れることが必要であるというように語りを更新した。そこに着眼した読み解きが3である。ドミナント・ストーリーの5は、親をはじめとする周囲の人の評価によって職種を迷っている学生が、今一度自分の中での志望度そのものに立ち返って後悔のない進路選択をしたいという決意表明であった。

一連の語りを試みた私達は、特に何らかの「病」や「問題」に直面したもの同士として対峙しあったわけではない。「言いつばなしの聞きつばなし」というセルフヘルプグループでよく使われる手法を通して語りの場を味わってみたのである。「ユニークな結果」を無視することで単一のものとして成り立つドミナント・ストーリーはしばしば我々を苦しめる。互いの語りに立ち会うことで「社会的出来事」（野口2002=2003:81）としてオルタナティブ・ストーリーが成り立つのは、治療や援助の現場であろうと、学生同士の語り合いであろうと同じである。

2) リフレクティング・チーム

リフレクティング・チームとは、セラピーの場で通常は固定している観察する側（専門職チーム）と観察される側（被支援者側）の関係を形態として交代させることによって、援助方針の膠着を解き、支援される側に主体的な力を取り戻すための手法である。(野口 2002=2003:112-113) これは治療チームの中で意見の不一致があったり、どう対応してもうまく行かなかつたりする事態を打破するためにアンデルセンが提唱したものであり (Andersen 1992:89-114)、援助する側とされる側の力関係を解くという大きな変化を可能にした。

今回の語り合いはもちろん治療や支援の場ではないので、文字通りのリフレクティング・チームが成り立ったわけではない。しかし何人かのメンバーは次の語りの構造の中に同概念を読み解いた。

ひとつは、二巡にわたる学生達の語り合いの日に病欠をした塚本が後から録音起こし原稿を見て述べたコメントである。

まず何を話すのかというテーマ、言いつばなしのルール、定義を学生が決めているのが印象的だった。これは教員がある種の強制力を持って創る「授業と言う場」から開放され、授業にもかかわらずその場を支配したり統制したりする人がいないというリフレクティング・チームの体験だった。(塚本奈緒子)

同じ回を、脇田は次のように述べた。

3年生メンバーによる二巡目の語りが終わった後に、小山(教員)も語りに加わる場面があった。この時、今まで小山(教員)に語りを聞かれている立場だった3年生メンバーが、反対に小山の語りを聞くという体験をした。このことにとって、教員と学生という立場が生み出しがちであるワンウェイ・ミラーの放棄がなされたのではないかと感じた。小山が語りの輪に入り、客観的な観察者という立場から降りたことによって、この位置関係にゆらぎが生まれたと考える。観察する側とされる側の交代をする体験によって、教員と学生の両者を含め、交代する前とは違った意識を持てたのではないかと感じた。(脇田真衣)

このときに、小山(教員)が語ったのは、学生メンバーの語りに対するコメントなどではなく、自らが大学生活を終えて就職に向かうときにどのような意識を持ちどのような活動をしたかということに関する失敗談も含めた内容である。

3) 言いつばなしの聞きつばなし

言いつばなしの聞きつばなしとはセルフヘルプグループで取り入れられることの多い手法である。誰かの意見に対して、意見を述べたり、感想を述べたりせず自分の順番が着たら自分の話したいことを話し、参加メンバーはそれにじっと耳を傾け、そこで議論はしないというシンプルなルールである。これは通常の会話を持つ評価と査定をさけることによって、そうした相互作用によって制約され生み出される「適切な語り」や「無難な語り」という一定の枠をはずそうというものである。(高松 2004=2009) これはナラティブ・アプローチが述べる「無知の姿勢」にも似ている。(野口 2002=2003:166-167) これらの意味することや効果というものについて体感したという意見は多く聞かれた。木原はそれについて次のように述べている。

ゼミで、「語りを聞き届けること」を体感できたことは非常に大きい。「語り」の場において、物語を聞き届けるひとの存在が大きな役割を果たすことは言うまでもない。言いつばなしの聞きつばなしが成立したのは、もちろん「語りを聞き届ける空間・雰囲気(聞き届ける人々が創りあげるもの)」が前提にあつたことである。この前提の下、言いつばなしの聞きつばなしを体感として得られたことは、自らに大きな変化をもたらした。

まず、相手に評価を下されたり、また相手を説得しようとしたり、それらを前提としない語りが可能であるということ。我々の日常生活では、それは一見不可能であるかのように感じてしまう。誰かと会話をすれば、何かしらの反応が返ってくるわけで、非言語的メッセージにせよそのまま言語として発せられるものにせよ、何かしら自らで受け止めなければならない。時には、そこで激しくエネルギーを消費してしまい、「語らない」という選択肢も出てくる。大学に入ってからの私は特にそうだった。「語らない」という選択を取ることによって、相手に

裁かれたり評価されたりする恐怖から逃れてきた。それは非常に楽な行為であるが、自己を語らないがゆえに、自らをこの小さい「大学」というコミュニティの中でさえ、どのように位置づけて良いかも分からず、既に出て上がっている「ドミナント・ストーリー」にしがみついていたのだ。そんな私が、自らの「語り」を聞き届けてもらえた一種の「居心地の良さ」や、「まだ、語ってもいいかも」「前に向かっていけそう」という感覚を体感できたことにより、机上のナラティブが、躍動感に満ち溢れたナラティブに変化したのであった。(木原亜季)

同様に青木は次のように述べた。

普段人と話していて将来のこととなると、何で？どうして？とか、否定されたりとかすると、益々分からなくなってしまい、不安なことが増えたりする。なので、語りっぱなしというのはとても気が楽だった。そしてみんなの語りを聞きながら自分の(考えや気持ち^{カクゴウ}をそこに)落とし込むことが出来るので、自分自身の力で物語を築ける感じだった。同じ不安をもつ人同士だったから、気兼ねなく話せた。おこした文字を読み返すと、聞き逃した部分なども読み、さらに自分自身でゆっくりと考えられるので、とても良かった。就職活動が終わって、また1年後ぐらいに見直して、また自分の物語を語ってみたい。(青木恵聖)

落合は、学生同士の語り合いに見るセルフヘルプの性格とそこに見る課題を以下のように表現した。

AAの人たちは自らの行動が“自分だけ”異常であると考えたことで不安を感じる。これを言っぱなしの聞きっぱなしの環境において話すことで、同じ病気で悩んでいる人も自分自身と同じような内容で悩んでいたということが自然と理解でき、お互いに何も言い合わないことにより否定されないため一層の安心感を得られるとい

うのが言っぱなしの聞きっぱなしの本質の部分だと考えた。

では私たちが行った言っぱなしの聞きっぱなしはどうだろうか。将来についての悩みには答えが無いと言っても過言ではない。私たちは日々様々な意見を聞き、その意見に翻弄され、影響を受けながら正解を探そうとしている。この状態は依存症の状態と似ているように思う。解決の糸口が見つかりにくいためである。だからこそ同じ境遇にある人の将来について聞くだけでも、悩んでいるという境遇を共有することができるだけで安心感が得られるのだ。(落合歩)

一方学生による語り合いの日に病欠だったため、期せずしてメールで語った塚本は次のように記した。

私自身の語りはメールでさせてもらった。事前に、皆から「メールで語りをすればいい」といわれていたのが背中を押して発信したが、恐らく場を与えられてのみんなの語りとは少し違うものになったと思う。その場で顔を見合わせての語りはどうしても非言語メッセージ(ボディランゲージ)があり、それが一つの問題になっていたが、何のメッセージもない中で一方的に語るというのは中々怖いものがあった。突き詰めれば私がした語りが一番言っぱなしの聞きっぱなしに近いものなのだろうが、正直相手に対して何の影響も反応も与えられない発言は自分の中で記録以外のどんな意味になるのかわからない、というのが感想だった。(塚本奈緒子)

これは言っぱなしの聞きっぱなしが誰の顔も見えない宙に向かって発せられるものではないということを示していると言える。

最初に話した人の話の「内容やレベル」が次を決めることの指摘をしたのは中田である。

今回の学生同士の言っぱなしの聞きっぱなしをした

時に、話す内容は「将来」という大きな枠にくくられていたにもかかわらず、1番最初に話した人が卒業後進路の内容について話してから、2番目に話す人、3番目、4番目…皆が軸を「卒業後の進路」にして話していた。もし、1番目の人が将来でもまた違うものを話していたらそれ以降に話す人も違うものを軸にして話していたのではないのかと考えた。これは1番目に話した人の内容のレベルがドミナント・ストーリーになっているのではないのかと感じた。(中田有紀)

この説明は「ドミナント・ストーリー」というよりは、会話分析における隣接ペア、呼びかけ－応答シーケンス(鈴木 2007=2009; 24-25)に類似した暗黙の話題選定や、話して良いレベルの統一が起こっていることの指摘であろう。塚本の指摘した怖さとはおそらくこの「レベル」の読みがきかないことに由来すると考えられる。対面の「語り」においては、こうした暗黙の促しは何かをしゃべるよう言葉で明示するよりもむしろ強い強制力を持っていると考えられるため、語りの場を構成する時にはその功罪に留意しておくべきであろう。

4) 問題の外在化

ユニークな結果やオルタナティブ・ストーリーとの関連で言われる「問題の外在化」について、今回の取り組みの中ではむしろ二巡にわたる語り合い及び、それを文字データにして読むという「方法」との関連で指摘された。脇田はこれについて次のように述べる。

(録音起こしをした原稿を手にしたときに)感じたことは、自分を含めたその語り合いの場が、少し日にちを置いたせいもあり、一つ昔の物語のように写る、という不思議な感覚だった。語っている瞬間には、自分の発言を中心に、自分の側からの視点でしか他者の意見を感

じることができなかった。(中略)しかし、テキスト化された物語を読んでいると、「あの場で語った自分」から少しはなれて自分を含めた全体の意見に対してすべてに同じ価値と注目度をおいて理解することができた。(中略)今回の語りではテキスト化された「物語としての自己」を、別の自分が読むと言う体験により、自分と、自分にまわりついている問題を(分離し)問題を外在化することができたのではないか。(脇田真衣)

テキスト・アナロジー(White and Epston 1990:28-38)を適用して多様な読みに開かれる語りを体験しようとしたときに、前述の言いっぱなしの聞きっぱなしに加え、語りを文字にし、時間を置いて再読する方法の可能性を体感したということであろう。このような効果は石川が継続しているウェブログにも類似のものがあるといえる。

(2) 将来について

このようにして一連の語りに立ち会った後の「将来」はどのように更新されたのであろうか。その全体像を示したのが次の図3である。

大きな流れとしては、各自にとっての「将来」が、「むしろわからないもの」になったととらえることができた。ゆえにそれは「不安」と抱き合わせであり、「恐怖を伴う真っ暗闇」であったり、「壁を乗り越えるもの」であったりする。また、そのような不安を伴いつつも「将来」は「悔いなく選び取って行くもの」であったり、「明るいもの」であったり、「自由なもの」であったりもする。これは、当初の語りの中で暗黙のうちに語られた「正しさ」をめざす「方向A」が、そちらに進んだからと言って正解を保障されるとは限らないことへの気づきである。同時に、石川が示したような当初の計画と違っていても結果オーライとなる人生の魅力に接した時に、むしろ積極的にひきうけようとする不安であるともとらえられた。

好きなことをやったら生きていけますよね、きっと。
(塚本奈緒子)

前述の落合の語った「正解探しへの依存」が、誰にとっての正解か、またそれを判断するのは誰かといったことに思いを至らせることによって、「『正解』は存在しない」というオルタナティブ・ストーリーを生きようとする姿に変化したのではないだろうか。ここで言う『正解』とは、石川も語ったように、自分ではない誰か他者の目による判断、認定、賞賛等を示していると考えられ、たとえそれが手に入ったとしても自ら見つけ納得する「正解」と合致するとは限らない。もちろんこれは二者択一の話ではなく、相互作用もあるので、合致する場合もあることは言うまでもない。これに関連して木原は次のように語った。

人が皆それぞれのドミナント・ストーリーを持っていることは決してマイナスなことではない。ただしオルタナティブ・ストーリー（ユニークな結果）を取りこぼしていることが非常にもったいない。(木原亜季)

結局方向Aと方向Bの間にある多くの選択肢に対して柔軟に開かれながら、最終的には「主体的に引き受ける将来」という方向Cに向かうことが示されていたと読める。同時に石川が示したような「今を丁寧に積み重ねて行くこと」が将来そのものであるという認識に賛同する意見もあった。

IV. 考察とまとめ

今回の取り組みは、過ぎこし方と今の連なりをウェブログという新たな語りの場にて表現し発信し続けている石川の語りを軸に若い学生メンバーの語りを重ね合わせる形で「場」を作り、語りの

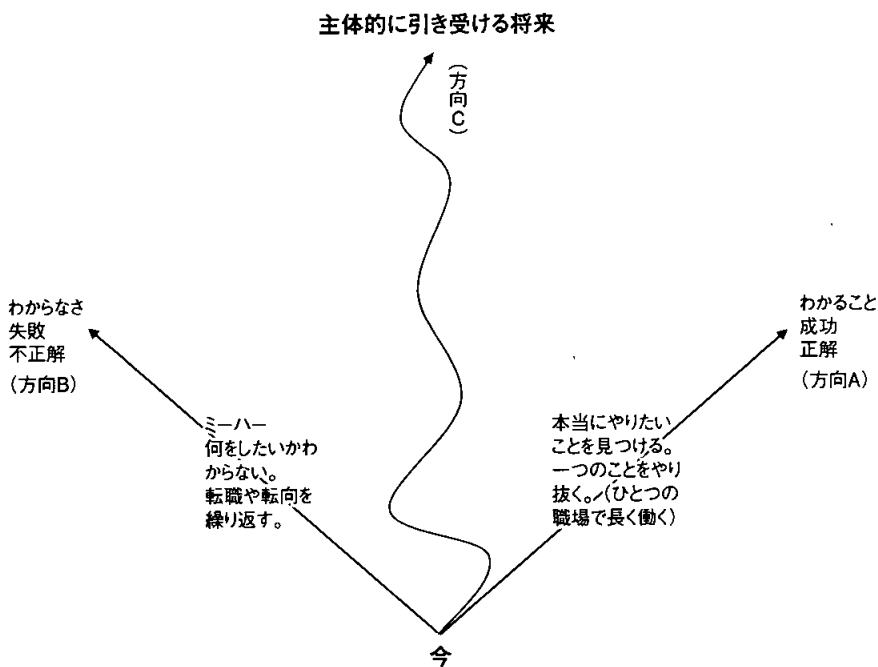


図2

更新を味わってみたものである。学生メンバーによって期せずして選ばれたテーマ「将来について」は、2009年度末現在の雇用をめぐる社会情勢と、同時に社会福祉領域の専門職性がはらむ課題を反映するものでもあった。

大学新卒女子の就職内定率がここ数年顕著に下がったわけではないが⁶⁾、現時点での高止まりする完全失業率や減少する就業者数の実態から企業が雇用増加に慎重な姿勢を示していること⁷⁾が学生メンバーの就職活動に影響しているといえるだろう。また、社会福祉領域における代表的な国家資格である社会福祉士及び介護福祉士を規定する法律の改正によって、科目要件や実習要件に対し、より強いしほりを設けた新カリキュラムがスタートする中で、しかし同時に当該領域のはらむ矛盾が解消されているとは言えず、「福祉か一般か」という語りの中にあつた大きな問いはそうした一般傾向とそれに対して示す大学サイドの微妙なスタンスも反映しているものと位置づけることが出来る⁸⁾。

社会福祉教育学校連盟の行った調査報告によると、同連盟に参加する四年制大学で、2002年度から2007年度の5年間を見た場合、福祉・医療系の領域に就職をした割合は48.8%→53.0%→51.1%→45.8%→42.0%→37.8%と推移し4割を切っている。一方、一般企業に就職した割合は同じく四年制大学の場合、同期間で19.1%→15.0%→21.8%→26.0%→32.0%→35.0%と増加傾向にある(社会福祉教育学校連盟 2009)。これに関しては、単純に福祉離れとは取らない見解もある。なぜなら、上記の調査が3月卒業生を対象に行われているのに対して、福祉の実践現場では、現在多様な雇用形態を見込みつつ、社会福祉施設、機関への採用時期が必ずしも3、4月とは限らず、日常的に採用を検討するためにハローワーク、福祉フェア、人材センター等の利用をしているからである(小山他

2010:2-3)。学生メンバーの語りの中にも大学院修了後や、一般企業で経験を積んだ後に福祉領域に「戻る」可能性を示唆した語りがある。今回の語りにおいては明示的に示されることはなかったが、女性のライフサイクルを考えた時に、結婚や出産、子育てといった契機を経て勤務先や領域を変更する可能性については含意されていたのではないだろうか。福祉領域とはそのようなライフサイクルの変化の中で改めて選ばれる可能性のある領域であるとともに、逆に人の生活そのものを支えることが多いという特徴を踏まえての特有な厳しさも持っている。三交代勤務といった勤務形態、また児童養護の分野で顕著にみられるように、日常の業務をビジネスとのみ区切ることが、場合によって難しい職務の性質がそれを示しているといえるだろう⁹⁾。

語りの主要な部分を占めたこれらの要素を含め、語りの場を開き、そこでの語りとその更新から体感されたことが今後の彼女達の新たな作法を形成して行くことを目指すという当初の目的のひとつはある程度達成されたといえるのではないだろうか。なぜなら、語りだしにおける不安の表明と自己批判が、石川の語りに立会い、さらに語りなおす中で、積極的な意味で「不安」をひきうけていく表明に近づいたからである。近づき方はもちろん個人によって違っており、単純にそのようなひきうけができればすごいと「感嘆」する立場から、実際にそうして見せようと「決意表明」する立場、また自己における多声を自覚しつつもだからこそ先は真っ暗闇であると「さらに強い不安」を表明する立場まで多様である。しかし、いずれにしてもそのようなバラエティーに開かれる場を誰に強制されることもなく味わったという意味は大きいのではないだろうか。

一方、もう一つの目的、卒業研究に向かう姿勢と方法について何らかの示唆をえたかどうかか

については次年度1年をかけて教育実践の中で見て行く予定である。

V. 終わりに

今回、一連の語りに取り組むプロセスを通して、小山（教員）はメンバー一人ひとりの個性と魅力が輝きだすのを感じた。内容の分析に当って発言の文字起こし原稿やリアクションペーパー及び最終レポート等の素材に何度も目を通すことになり、多くの学生が示したようにそこに、各自の語りが必要な輪郭をもって存在することをいやおうなく感じたからであろう。それと同時にそれぞれの発言が場合によって背後に同等の重みを持つオルタナティブ・ストーリーを携えており、それらの全体像を丁寧にたどろうとすることの持つ可能性についても目を見開かれる思いであった。このように「語り、語られる」体感を是非今後の生活実践につなげていきたいものである。

また、今回は仔細に取り組むことが出来なかった教員とゲストスピーカーの語りを、場を構成した対等な構成員の語りとして分析する機会を持ちたい。それは、実践という相互作用の中にある自らを不可視化しない取り組みの一つでもある。

学生13名の中に、1名最終レポートを再提出したメンバーがいた。彼女は小山（教員）の出した課題の意味がよくわからなかったということを正直に表明し、ある種自分を責める姿勢も示した。しかしこれは、彼女の理解が立ち行かないというよりは、案内役である小山（教員）の説明が不十分であることの証左とも考えられた。教育プロセスにおいてこのような場合を例外ととらえるのではなく、いかにとりこぼしなく次に結びつけるかを考慮しなければならない。

本取り組みの限界と課題としてはさらに次のことがあげられる。語りを楽しみ、仕上げのプロダクトの意図を十分汲んで最終レポートに至る参加

はできたものの、本報告を完成するプロセスで学生メンバー全員がデータの質的な分析に十分な参加を保障されたとは言いづらい。これは、こうした報告書を作成するか否かの部分から時間をかけて話し合い、実質の作業が後期授業終了後にならざるを得ないと言う状況も反映している。また、主体的な関与の度合いをもっと増すことが出来たとして、こうしたアクション・リサーチ的とりくみについては、やはり成績付与の権限を持つ教員と学生の関係を十分自覚の上で方法を吟味する必要がある。そうでなければ「意義ある取り組みである」という表明を暗黙のうちに強制することになりかねない。何人かが最終レポートで、リフレクティング・チームに近い感覚を読み解いた。これは、上述のような権限に基づく関係の現実を押しさえした上でも、学生の主体的力を伸ばすためのしかけはさらなる工夫の可能性を秘めていることを示していると言える。与えられた実践現場をさらに大切にしたい。

(註)

- 1) 近年のソーシャルワークへの批判としては、①対制度政策の機能をうたいつつも、現実是对個人及びごく狭い範囲の仕事が中心である、②「答え」はひとつではないのに、専門職の判断で上から押し付けている、③環境サイドの不備による抑圧の経験を、個人が克服すべき悲劇にすりかえている、等が代表的である。
- 2) 「私のブログ」(楽天ブログ)
<http://plaza.rakuten.co.jp/wakuwakunikki/>
- 3) 小山（教員）の語りは、大学での仕事を楽しみ打ち込む「現在」を大学生時代にめざす「将来」として想定したこと、そこに到達するプロセスでは何回かの移籍を経験したことをまず語った。次に純粹に時間的な

将来としては、いくつかの現状における課題（心身の老化に向き合うこと、家族の状況、親の世代のサポート）についてカバーした。「語り」の場で無敵の強者としての「専門職」（Gergen1999:247-285）の位置を降りるため、1つには互いに伝達される情報の量と質が同程度であるべきことを念頭においての自己開示である。

- 4) ここで言う「社会福祉職」とは、暗黙のうちに社会福祉士の受験資格取得を前提とする実習対象施設等社会福祉領域の利用者へのサービスを担う第一線の実践機関、施設を意味していると考えられる。ただ、周知の通り、その社会福祉士資格自体が職域の拡大を目指しており、実際には従来よりも広い範囲の組織が対象となりうる。
- 5) パフォーマティブ（遂行的）な発話と言う概念自体は、1950年代に英国の哲学者J・L・オースティンによって展開されたもので、発話内容が何かを陳述し、状態を描写し、正しいか間違っているかのどちらかのみではなく、その発話がさしている行為を実際に行っていることを示す。つまり発話そのものが行為ということである。（Culler 1997:140）「〇〇を××と名づける」のように言葉を発する行為そのものが同時に何かをなしているような状態を示す。
- 6) 厚生労働省報道発表資料（2009年1月16日）就職内定率の推移
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/01/dl/h0116-3c.pdf> (2010.2.10)
- 7) 米国・日本・ユーロ圏の雇用関連統計（11月）2009年12月10日
http://www.smam-jp.com/market/report/marketreport/1208891_1951.html (2010.2.10)

- 8) 社会福祉学科に入学した以上、ある意味で「最低限」取るべき資格として社会福祉士を位置づけ、全員にそのための学びを保障した上でさらに学びが発展、展開することを推進するというのが一つのあり方であるという理想論に近い考え方がある。その一方で、名称独占資格としての「社会福祉士」が現実社会でどこまでの力を持つのかに対する懐疑と、また同時にいずれにしても改正社会福祉士・介護福祉士法における新たな定めの中ではより人数を限定しての学習にならざるを得ないという実務上の問題も抱えている。
- 9) 社会福祉施設においては、場合によって利用者の人生に丸ごと向き合う必要があり、それは支援を担当する専門職のキャリアアップや結婚や出産といったライフサイクル上の変遷をも含んだ自己実現と矛盾することもある。例えば児童養護施設の中には支援者が結婚や出産を契機に退職することを利用者である子どものためを考えた時にむしろ当然とする職場もなくはない。

（文献目録）

- 秋田喜代美・能智正博監修（2007=2008）『はじめの質的研究法 臨床・社会編』東京図書。
- Alston Margaret and Bowles Wendy (1998=2003) *Research for Social Work*, Routledge.
- Culler Jonathan *Literary Theory: A Very Short Introduction* Oxford University Press 1997 (=2003 荒木映子・富山太佳夫訳『文学理論』岩波書店)。
- Andersen Tom 「リフレクティング手法をふりかえって」 McNamee Sheila and Gergen Kenneth J (1992) *Therapy as Social Construction* Sage publications Inc.

- (1997=2003 野口裕二・野村直樹訳【ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践】金剛出版).
- Epston David and White Michel 「書き換え療法－人生というストーリーの再記述」. McNamee Sheila and Gergen Kenneth J (1992) *Therapy as Social Construction* Sage publications Inc. (1997=2003野口裕二・野村直樹訳【ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践】金剛出版).
- 藤江康彦「幼小連携カリキュラム開発へのアクション・リサーチ」秋田喜代美・能智正博監修 (2007=2009)【はじめての質的研究法教育・学習編】東京図書、243-274.
- Gergen, Kenneth J (1999) *An Invitation to Social Construction*, Sage publications Inc. (=2004, 東村知子訳【あなたへの社会構成主義】ナカニシヤ出版).
- Kemmis Stephen and McTaggart Robin 「参加型アクション・リサーチ」Norman Denzin K and Lincoln Yvonna S (2000) *Handbook of qualitative research, second edition*, Sage publications Inc. (=2006平山満義監訳、藤原顕編訳【質的研究ハンドブック 2巻 質的研究の設計と戦略】北大路書房、229-264).
- Silverman David 「発話とテキストを分析する」Norman Denzin K and Lincoln Yvonna S (2000) *Handbook of qualitative research, second edition*, Sage publications Inc. (=2006平山満義監訳、大谷尚、伊藤勇編訳【質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈】北大路書房、211-225).
- 池田謙一編著、小林哲郎他著 (2005=2006)【インターネット・コミュニティと日常生活】誠信書房.
- 岩田泰夫著 (2008)【セルフヘルプグループへの招待 患者会や家族会の進め方ガイドブック】川島書店.
- Kats Alfred H (1993) *Self-Help in America: Social Movement Perspective*, Twayne Publishers, (=1997久保紘章監訳【セルフヘルプグループ】岩崎学術出版).
- 小森康永・野口裕二・野村直樹 (2003)【セラピストの物語/物語のセラピスト】日本評論社.
- 社団法人 日本社会福祉教育学校連盟 (2009 10月)「社会福祉社会学部・学部、大学院卒業生の進路等調査報告書 2008年3月卒業生対象」.
- 能智正博編 (2006)【〈語り〉と出会う 質的研究の新たな展開に向けて】ミネルヴァ書房.
- 野口裕二 (2002=2003)【物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ】医学書院.
- 野矢茂樹 (1997=1999)【論理トレーニング】産業図書.
- 岡林春雄 (2009)【メディアと人間 認知的社会臨床心理学からのアプローチ】金子書房.
- 小山聡子他「新春座談会 経営戦略と人材確保～今求められる人材とは～」独立行政法人福祉医療機構【明日の福祉と医療を作るワムWAM】2010年1月 p2-9.
- 小山聡子他 (2008)「恋愛2007－社会福祉演習Ⅰにおける教育実践－」【社会福祉】(日本女子大学社会福祉学科) 48, 199-221.
- 小山聡子他 (2009)「むかしむかしあったとさー2008年度社会福祉演習Ⅰ教育実践－」【社会福祉】(日本女子大学社会福祉学科) 49, 165-196.
- 鈴木聡志 (2007=2009)【会話分析・ディスコース分析 ことばの織り成す世界を読み解く】新曜社.
- 高橋規子、吉川悟 (2001=2003)【ナラティブ・セ

ラビー入門」金剛出版.

高松里 (2004=2009) 『セルフヘルプ・グループと
サポート・グループ実施ガイド 始め方・
続け方・終わり方』金剛出版.

White Michael and Epston David (1990) *Narrative
Means to Therapeutic Ends* Dulwich Centre
Publications (1992=2002 小森康永訳『物
語としての家族』金剛出版).

山口智子『老年期と質的研究：高齢者は人生をど
のように語るのか』秋田喜代美・能智正博
監修 (2007) 『事例から学ぶ はじめての質
的研究法 生涯発達編』東京図書、297-
315.

山下清美他 (2005) 『ウェブログの心理学』NTT
出版.